誌上行学講習会

高佐日煌上人

例をあげましょう。デパートへ買い物に行く。方々まわっている中に腹が減る。食堂へ行く。あの飯を食べようという意欲が起る。何でも良いから食べようというのではない。サンプルを見てあれでなくこれにしようという欲が出る。これが志向であります。これはうまいはずだからこれにしようというのが知欲、食べて楽しもうという欲が楽欲。こゝまでが覚意識であります。

そして未だ心を動員していません。いよいよこれからが心を動員するわけでありますが、この間に五官があるわけでこの五官という道具を通じてものを見るわけです。そこで頭の働きについてですが、生まれてから、もの心ついてからのことは自分の経験したことからは一応全部頭の中に入っているわけであります。これはテープに録音するように、或は映画のフイルムに治めるようにです。忘れるということはありましょうが、一応とにかく経験したことは全部入るようになっている筈なのであります。何かを認識する場合、必ず今までの記憶を根拠にして、記憶の中から連想を引き出します。それに四種あって(一)単独想起、(二)同種想起、(三)類似想起、(四)関連想起等のキーポイントがあります。

(一)は例えば人に遭う。この人は誰だろう。顔は覚えているが名前が想い出せない。たしかに知っている人なんだが、こういうのが単独想起であります。(二)は同じ種類のものを考えること。例へば国づくし、花づくしというように、花なら花の同種のものを想起する。桜、桃、梅といったように。(三)はあい似たものを想起する。あまり良い例ではありませんが、親父の顔をヤカンといった風なもの、(四)はそれからそれえと関係したものを想起する。例えばのみといえばつち、針といえば糸といった風に。このように主我はこの四つのキーポイントをたゝいて、今この中のどれが必要かを探すわけであります。そしてこの役目を果すのが心意識、即ち脳味噌の働きによるのであります。自動的にそうなる。そうするのが心意識であります。（以下次号）

お題目で成仏するⅣ

釈尊の人類救済計画は、肉体的我からの魂の救済です。魂は、肉体に入りこむと、眼耳鼻舌身の五官を利用するようになりその意識は肉体的な感覚を中心として機能するようになります。したがって人間は肉体が自分と思うようになります。肉体が自分であると感じるようになると人間は霊界のこともそこで過ごしたこともわすれ、そこでの意識、魂のことも忘れるようになります。つまり人間が受肉する以前の意識を忘却します。

人間が肉体を持つて地上に生まれる以前は本仏即神の意識分張であるが故に神の意識そのものでもあったのですが、人は受肉によりその神性、仏性を忘れ動物化してしまったのです。ですから自然界の動物の生態をよく観察すると人間の行動もよく理解することが出来ます。テレビなどでよく子連れの女性と結婚した男性がその連れ子をいじめ、虐待し死に至らしめることが報道されます。私たちはよく人間なのにそんな酷いことが出来るなとショックを受け理解に苦しみます。そしてそんな親は、凶暴な特別な人なんだろうと考えます。

動物の熊の世界に目をやると独り者の雄熊は、母子連れのくまの子熊を殺してしまうことがよくあります。なんでそんなことをするのだろうと私たちは理解に苦しみ、やはり熊は獣だからと自分を納得させます。ところがよく観察すると雌熊は子供を養育中は雄からの求愛を受け入れないのです。この熊の習性から熊を殺してしまうと雌は雄を受け入れます。しかし雄が子考えると、男親の連れ子殺しも自分の子孫を残そうという動物の習性としては理解できないことはないでしょう。人間も他の動物のようほ乳類も、ハエなどの昆虫もそのＤＮＡは基本的に同様のようです。

以上から、人間は肉体を持つとやはり動物の一員であり、獣性の支配されている部分も多いのです。こうして人間は食性、眠性の本能、愚癡、怒り、足ることを知らぬ欲望の煩悩に支配され、生まれ育ち人生を送ります。そしてまた獣性に支配されたまま神性仏性をわすれ、生まれ変わり死に変わり永遠の転生を繰り返します。魂は肉体の牢獄に捉えられ得たまま、諸行無常の世界で生老病死、四苦八苦の苦しみにあえぎ続けるのです。

そんな人間を永劫の苦しみから解放するために、神なる釈迦は地上界に自ら肉体を持ち人間としての人生のなかで悟りを開きみずからの魂を肉体から解放し輪廻転生から解脱して見せたのです。釋尊は、こうして人類の解放の道筋を示されたのです。